

アメリカが内包するグローバル・サウス  
ー ヒトの移動と分断をめぐるグローバル政治経済学

立教大学 櫻井公人

1 グローバル・サウスへの「新興国」としての期待と、人口動態

・クズネッツは世界経済には先進国と途上国、そして日本とアルゼンチンしかないと分類した。非西欧世界で先進国化できたのが日本で、転落したのがアルゼンチンだった。その後、日本の後を追ったケースを世銀は『東アジアの奇跡』と呼び、マーケットは新興市場、新興国、BRICS などと呼んだ。新興国への期待には、人口、人口構成、資源、成長などがある。

・だが、新興国への依存にはリスクがある。BRICS 諸国の相互連関の結節点に中国があり、中国への成長期待が資源価格を押し上げ、それが資源輸出国の中国製品購買力を増す成長循環があった。だが、この循環が逆回転すればリスク循環局面となる。実際、中国は人口でインドに抜かれ（人口オーナス）、不動産バブル崩壊と「日本化」のリスクが加わる。

・逆に老いる先進国のうちで例外となりうるのがアメリカ、カナダ、オーストラリアなどで、移民流入が続けば人口増と成長を見込めるが、移民政策や多文化主義の是非が政治課題となって予断を許さない。建国以来の対立を背景に、最も先鋭な分断が今アメリカにある。

2 ヒトの移動と分断

・アメリカの分断は他の先進国の先駆的事例であり、さらにはグローバル・サウスの縮図かもしれない。というのも、アメリカ国内を見れば、平均寿命や乳幼児死亡率、またそれらの地域間格差などから、アメリカ国内にこそグローバル・サウスが見出されるからである。

・世界が中心と周辺とに構造化される中で労働力配置が決まり、移民が組織化された。アメリカ北部の製造業は世界市場との連結を避けたが、綿花栽培の南部経済は世界経済に連結していた。プランテーション労働の担い手は黒人奴隷であり、綿花の前はサトウキビだった。コーヒーを含め国際商品を栽培したブラジルやカリブ海諸国も似た労働力構成をもった。イギリスがアヘン戦争などを通じてアジアを植民地化した「ウェスタン・インパクト」がアジア近代の幕開けだった。奴隷解放後には中国人の苦力や年季奉公人も導入され、大陸横断鉄道の西側を中国人が、東側をアイルランド人が作ったと言われた。

・国内分断の重要な争点がアメリカ第一主義の復活と移民政策であり、白人のマイノリティ化への危惧がその背景にある。1964年公民権法を承けた65年移民法以降の流入では8割が非白人となり、アジア系とヒスパニック系が増えた。そしてトランプ政権のアメリカ第一主義は、移民流入を2016年の124万人から21年の38万人まで一気に減少させてしまった。

3 日本への教訓は何か。人口減少見込みの中、生活水準は低下した。クズネッツの言う「アルゼンチン化」の候補が「日本」なら、新しい「日本化」が「アルゼンチン化」になる。ややこしくてありがたくない事態を避けるため、他国の「移民政策」から学ぶことは多い。